

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	伴 俊典
論文題目	日本における中国戯曲受容の基礎的研究－江戸期から明治期を中心に－
審査要旨	
<p>本論文は、江戸から明治期にかけての日本人が、中国の明清戯曲を「漢籍」として、「白話文学」として、かつ「曲学」としていかに受容し、理解したか、その実態を解明するものである。</p> <p>日本における中国戯曲文学の受容については、従来特に「戯曲」という形式を重視することなく、中国近世白話文学の日本伝来の一環として、おおむね物語論的受容、即ちストーリーや物語のテーマが江戸文学に与えた影響という観点から、論じられてきた。江戸時代以降、中国の戯曲文学が書物として多数舶載されてきたものの、実際に原テキストに訓読や翻訳をほどこし刻書された現存例が極めて少なく、またそれらが部分的断片的な校勘・翻訳であった故か、これまで日本人が中国戯曲をいかに読解し、成果を得たかということとはほぼ顧みられず、白話文学の受容史においても、小説の受容のように 詳細に検討されることはなかった。しかし、近世中国語で書かれた書籍であり、かつ中国独自の「曲学」に基づいて創作された戯曲という文学形態とその内容を、日本人がいかに読み解き、理解し、日本語への翻訳を通じて日本文化の中に取り込もうとしたか、というプロセスを明らかにすることは、中国戯曲受容史の第一歩となる軽視できぬ問題である。</p> <p>本論文は、日中の物語の翻案における物語論的影響関係が論じられる以前に、まず日本人が漢籍を輸入し、収集し、校勘・注釈を通じてテキストを理解研究し、翻訳吸収するに至るまでの中国戯曲文学を巡る知的営為に着目した点で、従来の物語の比較文学的研究とは異なる独自の研究テーマを展開するものである。こうしたアプローチを可能にしたのは、これまで存在が知られていなかった早稲田大学演劇博物館所蔵の『水滸記』全訳写本が論者によって新たに発見されたこと、さらに当該写本の他に現存する二種の写本(山口大学所蔵本と関西大学所蔵本)との関係性が論者によって解明されたことである。従来の資料に加え、この新発見の資料を精緻に調査して得た成果は、本論文の白眉とする大きな功績と言ってよい。</p> <p>本論文の構成は、第一章の序論に続き、第二章から第四章が江戸期における中国戯曲研究、第五章から第五章、第六章が明治期における中国戯曲研究の考察に二分される。第二章においては、大庭脩氏らの唐船持渡書に関する先行研究を踏まえつつ、独自の調査を加えて、少なからぬ中国戯曲書が江戸時代に日本へ舶載された年代を同定し、中国で刊行された戯曲版本が余り時をおかず舶載されていたこと、日本人が中国戯曲文学作品のみならず、戯曲を解読するための韻書や曲譜も受容していたこと、書目の分類方法から中国戯曲が一つの文芸ジャンルとして認識されていく過程などの知見を提供した。</p> <p>第三章と第四章では、江戸期の日本人が訓読、注釈、校勘を行い、さらには翻訳を行った中国戯曲テキストを取り上げ、江戸期の中国戯曲解釈の特徴を考察するが、特に第四章で取り上げた『水滸記』全訳鈔本は、論者が新たに発見、発掘した資料であり、現存する唯一の首尾一貫した中国戯曲全訳本である。当該鈔本は、山口大学所蔵本、関西大学所蔵本、早稲田大学所蔵本の三種が現存し、山口大学所蔵本は中国の黄仕忠氏が近年発見したものの、関西大学所蔵本は夙に長澤規矩也氏がその存在を示唆しつつも研究されることなく埋もれていた資料である。従って新発見の早稲田大学所蔵本を加え、この三種の資料を関連付けて考証したのは、論者の新たな功績である。論者の一字一句に亘る丹念なテキスト比較分析によって、この三種テキストは、山口大学所蔵本、関西大学所蔵本、早稲田大学所蔵本の順に、語釈、部分訳の稿本から全訳が完成した定本、さらに推敲を施した改訂本へと至る過程を示す一連のテキストであることが証明され、極めて貴重な資料的価値が明らかになった。また、第三章と併せて、江戸時代の戯曲書の受容形態は、物語を理解するための「日本語訳」の完成を目的としたものであり、訓読、注釈は日本語訳作成のためであるとの見解を示した。</p> <p>第五章と第六章は、こうした江戸期における中国戯曲受容の形態や方向性が、明治時期にいかに継承され</p>	

あるいは断絶したかを、いわば学術史的観点から検証したものである。論者は、前章で考察した日本人の『水滸記』の受容のあり方をモデルに、明治時期の『水滸記』の研究状況を考察し、明治期においては、戯曲『水滸記』は中国小説史の中で小説『水滸伝』との関わりから論じられる観点が共通しており、江戸期に『水滸伝』ブームが起こる中で『水滸記』の読解、翻訳が進められた状況と軌を一にしていること、昭和初期の青木正児の『支那近世戯曲史』に至って、戯曲『水滸記』は小説『水滸伝』と決別し、中国戯曲史の中に位置づけられたとの見解を示した。第六章では、『水滸記』のモデルケースを端緒に、明治時期の中国戯曲受容の概観に目を向け、戯曲を題材とした漢詩の題詠から文化人による作品紹介、翻訳、文学史・講義録の出版、個別のテーマ研究の順に段階を追って関心を広げていったことを明らかにした上で、この時期に中国戯曲研究に精力的に関与した森槐南に着目し、その研究の特色と中国戯曲研究史における位置づけを再考したものである。論者は、森槐南が講義録『詞曲概論』において、戯曲を「詞曲」の一部と位置付け、詞曲発展史の中で戯曲の発展を構想していたこと、一方で文学としてのみならず戯曲の舞台演劇としての性格を、上演の面からも体系的、総合的に論じようとしていたことを明らかにした。さらに、本論第二章で考察した戯曲の舶載書目と森が引用した戯曲作品がほぼ同傾向の偏りを示すことから、森の研究の資料的基盤が、江戸期に蓄積された中国戯曲受容の成果にあることを示唆した。

森槐南は、膨大な中国文学の論考・著作および漢詩文や戯曲の創作を残し、明治期の漢文学の中心的存在であるが、日本における中国文学研究史では近年までさほど大きく取り扱われることはなかった。近年、その漢詩人、漢文学者としての意義を見直す機運が高まりつつあるが、本論は戯曲研究史の視点からこれに一石を投じたものといえる。

以上の通り、本論文は、日本人の中国戯曲に対する知的営為のあり方そのものについて考察することを通し、中国戯曲の受容を日本漢学史の中に位置づけようとする意義を有するスケールの大きな試論でもある。細部の論述においては、十分には意を解しづらい表現も幾つか見受けられるが、極めて学術的価値の高い資料を独自に見出し、さらに従来埋もれていた、或いはほとんど顧みられることのなかった研究対象や研究資料を体系的に再考することにより、少なからず新たな知見を提示したことは、本論が独自のテーマを開拓した労作として十分に認めうるものである。よって本論文は早稲田大学の課程による博士（文学）の学位を授与される学術的価値を有すると判断する。

公開審査会開催日	2015年 6月 13日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		中国白話文学	岡崎 由美
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		中国古典学	稲畑 耕一郎
審査委員	埼玉大学・名誉教授		中国白話文学	大塚 秀高
審査委員				
審査委員				